

令和6年度 学校経営報告

校長 佐藤 亜紀子

I 目指す学校像

『 信頼と敬意に基づき、互いに認め合い学びあう中で主体的に自らの能力を伸ばす学校 』

- 1 人権を尊重し、挨拶を大切にしている学校
- 2 日常の授業の充実を目指し、時間を大切にしている学校
- 3 安全・安心な教育環境を整備し、健康に活動ができる学校
- 4 保護者、地域、社会から信頼される、開かれた学校
- 5 共生社会の実現に向け、相互の信頼と敬意を大切にしている学校

II 今年度の取組目標と自己評価

(◎達成 ○ほぼ達成 △一部達成 ×未達成)

1 学校運営：都立学校の教職員としての自覚を常にもち、自らのサービスの厳正と心身の健康の保持・増進に努める

1	計画的な服務研修・服務事故防止研修を実施し、体罰・不適切な指導、ハラスメント等を防ぐ（学期1回以上）	◎
2	全教職員による児童・生徒の「君、さん」付けを始めとし、人権尊重を徹底する	○
3	いじめの未然防止に努め、早期発見・早期対応に関する研修を行う（年間2回以上）	○
4	事故ゼロ、服務事故ゼロを目指す（安全点検◎、ヒヤリハット周知○、個人情報管理○、机上整理整頓○）	○
5	デジタル技術を活用し、効率的業務およびコスト削減を実施する （分掌・学年会等のペーパーレス会議、教材蓄積データの活用による業務・授業準備の効率化）	○
6	経営企画室と学年や分掌等が連携し、効率的、適正な予算執行を行う。 （センター執行率70%以上、組織・マニュアル・執行状況等見える化）	◎
7	校内教職員でチームを作り、校内業務や今日的課題等を双方向に相談できる相談・研修会を実施する（1回以上）	◎
8	教職員一人一人が、自己の担当職務（職層、学部、学年、分掌等）に精励し、学校運営に主体的に参画する（自己申告書に学年や分掌で担う事柄を記載）	○
9	恒常的な長時間労働を防ぎ、仕事の充実に向けてライフ・ワーク・バランスを整え、心身の健康を保持する （No会議Day月1回、My定時退任日1回以上、夏休全取得、年休取得年間15日、アウトリーチ型相談事業導入等）	○
10	教育実習、学生ボランティア等に協力し、次世代育成に寄与する	◎

2 学習指導：児童・生徒の状態に応じた専門性のある知的障害教育の充実

1	外部専門員と連携して、課題設定・指導内容・指導方法の充実を進める（外部専門員 累計750時間以上）	○
2	学習指導要領を踏まえた各教育課程の実施、指導と目標・評価の一体化を推進する（城東シラバスに則った指導内容の精査と教科単元シートの拡充）をする	○
3	児童・生徒の障害特性や各種アセスメント結果を指導内容・指導方法に反映する（学習環境調整、スケジュール、ジグの工夫、タブレット端末の活用、一人1事例以上の実践報告、教材展示等）	○
4	児童・生徒自身の伝える力を伸ばすコミュニケーション指導を充実させる（個別指導計画へ反映させる）	○
5	児童・生徒自身が主体的に学ぶ為にタブレット端末等を活用する等、デジタル技術を適切かつ有効に活用した授業を実践する（教科単元シート、教材展示）	○
6	日本の伝統文化学習等の実施（書道、華道等）	◎
7	美術や音楽への関心を高める芸術教育を充実させる（障害者アート展への出展、音楽コンサート鑑賞等）	◎
8	TOKYO ACTIVE PLAN for students」を参考にし、児童・生徒一人一人の状態等に応じた体力向上及び健康の保持増進の取組を推進する（運動習慣作り等）	◎
9	ALT（外国人英語等教育補助員）を活用した外国語教育の推進（小学部3～6年10時間 中学部20時間）	◎
10	学校図書館や近隣の図書館を活用し、読書活動を充実させる（読書週間の設定 等教員向け研修会）	○

3 生活指導：安心・安全な教育環境を整備し、校内安全指導の強化

1	各種感染症等の防止○、校内事故ゼロを目指した校内環境の安全点検の実施◎、整理整頓○、清潔○を徹底する	○
2	スクールバス運行会社と連携を充実し、円滑かつ安全な運行を徹底する（連絡会・研修会 年間4回以上）	○
3	家庭と連携した日常生活動作（ADL）、基本的生活習慣づくりを推進する（教育支援計画、個別指導計画へ反映）	○
4	日常生活における自発的に挨拶・返事・報告をする習慣づくりを徹底する（挨拶、返事、活動前後の報告の励行）	◎
5	城東消防署・城東警察署・近隣学校・近隣町会と連携し、防犯・防災及び安全教育を推進する（連携訓練等2回以上）	◎
6	地域関係機関と連携した宿泊防災訓練を実施する（中学部1回）	◎
7	学校医・医療関係者・保護者と連携し、児童・生徒の心身の健康教育・保健指導を充実させる（医ケア、発達相談、整形診等）	◎
8	年齢、発達段階、障害の状態等に応じた「食育」を計画的に実施する（食習慣、マナー、食文化、栄養等）	○

4 進路指導：児童・生徒の将来の自立と社会参加を目指すキャリア教育の推進

1	キャリア教育の視点で小・中学部の教育内容を整理する（各教科等を合わせた指導について教科単元シートに反映させる）	○
2	学習環境やジグの改善、児童・生徒の課題や発達段階に応じた到達目標を明確にする工程分析等、子供たちが自ら取り組む活動の推進（研修会 年間1回以上）	○
3	公共施設や公共交通機関等を利用する際に必要な社会的ルール等の指導を計画的に行う（9年間一覧表作成）	○
4	生活年齢や児童・生徒一人一人の状況に応じた、一人通学に向けた指導を進める（個別指導計画に反映）	◎
5	学校生活支援シートや個別指導計画を進級・進学時の引継ぎツール及び保護者との情報共有ツールとして活用する	○
6	児童・生徒自身が自己効力感（自分ならできる。きょうまくいく。）を高める指導を実践する（係活動や児童・生徒自身が立てた目標の達成等の成功体験、自己を振り返り成長を実感する取り組み等）	○

5 特別活動・その他：地域の特別支援教育推進に向けたセンター的機能の充実

1	全校における学年行事、学校行事等のねらい、内容等を経年的学習のつながりを観点に精査する（学校・学年行事に係る一覧表を根拠に実施）	◎
2	学校生活支援ファイルやS SW等を活用し、入学時から中学部卒業までの児童・生徒に係る相談支援を充実させる	○
3	学校間交流・社会貢献活動・地域との協働活動等において社会や地域とかわり、共生社会の形成および自立と社会参加につながる取り組みを進める（各学部、学年1回以上）	◎
4	各区教育委員会や保護者と連携して副籍交流を進める（直接交流希望者 交流2回以上）	◎
5	通学区域教育委員会及び就学前施設等との各連絡会を実施し、円滑な就学・転出入相談を進める	○
6	学校公開、学校ホームページ等を使い、情報発信する（HP年間活用計画の作成と更新年100回以上）	○
7	支援エリア教育委員会と連携し、支援エリアにおける特別支援教育の充実に努める	◎

Ⅲ 学校評価アンケートに基づく評価

本校の教育活動への取り組みについては、今年度の学校評価アンケート（学校運営連絡協議会）における以下の質問において肯定的な回答が多いことから、具体的な教育活動について保護者の理解を概ね得られていると考える。

No.1-(8)「ICT 機器の学習指導への活用」については、小学部と中学部の差が出ている。学習導入期の小学部では、具体物教材を使うことが多いことから肯定的評価が低いと考えるが、教員が具体物教材とデジタル教材の双方を扱う技術を身に着けることは継続させたい。

No.	評価項目	小学部 保護者 肯定的評価	中学部 保護者 肯定的評価
1 (1)	お子さんは楽しく充実した学校生活を送れていますか。	98	94
(2)	学校での様子は分かりやすく伝わっていますか。	99	98

(3)	学校生活を送る中で、社会でのルールやマナーが育まれていると感じますか。	96	98
(4)	学校での学習は、お子さんの将来の生活・社会参加（キャリア教育）を意識したものとなっていますか。	92	96
(5)	学校行事での体験は、児童・生徒の成長につながっていますか。	97	99
(6)	「個別指導計画」は、お子さんの状況や発達課題に応じたものになっていますか。	100	99
(7)	「学校生活支援シート」は児童・生徒一人一人の一貫性のある支援の実施に役立てることができていますか。（支援内容の整理や共通理解、入学・進級時の引継ぎ、指導目標の設定等）	94	87
(8)	ICT機器が積極的に学習指導に活用されていますか。	65	75
2 (1)	学校は安全・安心な学校づくりに向けて、必要な対応を行っていますか。	100	99
(2)	学校は災害や事故に対して、各種訓練や十分な備えをしていますか。	97	99
(3)	教室の学習環境は、障害特性や状況に応じたものになっていますか。	98	96
(4)	学校の施設や設備は、児童・生徒の障害に配慮したものとなっていますか。	97	96
3 (1)	教員の児童・生徒への言葉かけや指導は、人権を尊重したものとなっていますか。	96	97
(2)	教員は、保護者からの相談や質問に対して、よく話を聞いてこたえてくれますか。	99	95
(3)	病気やけがへの学校の対応は、適切に行われていますか。	91	92
(4)	教員や経営企画室（事務室）の職員は、保護者の方へ丁寧に対応していますか。	97	98
(5)	教材費や行事の集金等の会計について、分かりやすく説明や報告がされていますか。	92	98

IV 校長所見

学校経営計画については、Ⅱの自己評価（方策達成度）は、ほぼ達成できていることを確認したので、次年度も、全教職員がそれぞれの役割を果たし、目指す学校により一層近づけるように努める。

Ⅲの学校評価アンケート（保護者）では、どの項目も高い肯定的評価を受けている。しかし、ICT機器を活用した学習に係る肯定的評価は、令和3年度が31%、令和4年度は54%、令和5年度は70%と徐々に高まっていたが、今年度の小学部は肯定的評価が65%に下がり、中学部は75%とさらに上がっている。これは、1つ目には、今年度の全校研究テーマが「学習における個別最適化～主体性を引き出す教材の工夫～」であり、研究1年目の今年度は、障害児基礎教育研究会の根本文雄氏を講師に迎え具体物を使った授業改善を進めてきた。特に小学部低学年では、児童自身の身体感覚を伴って学ぶ教材の活用が多くなったことが要因と考えられる。2つ目にはデジタル端末等を扱う技術は中学部生徒のほうが長けている割合が高く、教員も生徒のその状況に応じて教材を用意していると推察する。3つ目には、中学部3年間のシラバスで学ぶ各教科や単元で取り扱うデジタル教材を、中学部は上手に共有していると推察する。上記3つの要素を受け、2年目の全校研究では、具体物教材とデジタル教材等を、児童・生徒の状況や教科、単元等に応じて、より効果的に使うように展開したい。

現在の学校は、教員志望者減少・心身不調者増加と言われている。次年度に向けては、学校の行事を含む教育課程の見直しを図りながら、教職員のライフ・ワーク・バランスをさらに整えて、子供たちに効果的な教育活動を進めていく。